

「新たなライフスタイルを目指して」

李 志炯 (イ・ジヒョン)

以前からふくしまの状況を自分の目で確認したいと思っていましたので、今回のツアーはとても有益でした。特に、仮設住宅に住んでいる方、自分の家に戻った方、役所の方など多様な立場から話を聞くことができたことが、何よりよかったです。しかし、多様な立場から話を聞いて逆にふくしまの再生のためにはどうすれば良いかが分からなくなりました。

ツアーに参加する前にはテレビで観た情報を基に自分なりにある程度判断することができましたが、実際に現場に行くと、問題はテレビで観た情報だけではないことを知りました。本当にいろいろな問題が複雑に錯綜していて簡単に解決できる問題ではないことを知りました。でも、このような状況の中で自分ができることからひとつずつ解決しようと頑張っている住民たちの姿を見て感動を受けました。その姿を見て自分も力になりたいと思いました。

今回のツアーで最も興味をもったのは「家」でした。僕はデザインを勉強しているから放射能については聞いてもよく分からなかったのですが、物理学を専攻した専門家が勢いから放射能に関しては専門家に任せばよいと思いました。そして、僕は自分の専門分野であるデザインから役に立てることを考えようと思いました。それで、デザイナーの観点から「家」の問題を考えました。

仮設住宅に住んでいる方の話を聞いてお金・大工・コミュニケーションが問題であることが分かりました。そのことから、僕は外国との連携を考えました。政府の援助には限界があるので、援助ができない部分では外部からの助けを求めざるを得ないと思います。それで、東京オリンピックの諸般施設の建設計画と同様に人件費が比較的安く、技術協力が可能な東南アジアとの連携を考えました。それは日本の優れた技術を他の国の方に教えながら働いてもらうということですから、マーケティングをうまくやれば人件費や材料費などを低く抑えることができると思います。

また、日本に技術を学びに来た外国人を工事終了後にすぐ母国に帰らせず、その村で一定期間住むようにして建設した家の管理や町の再生に関連する仕事をやってもらい、町にコミュニケーションが形成されるようにします。そうすると、いずれ日本の方も戻ってくると思います。しかし、これらは政府がやってくれないと思います。それで、村と村の姉妹縁組みの形で進めばよいと思います。例えば、この前、テレビで韓国のある村と日本のある村が姉妹縁組みし、町の再生を進めているのを観ました。日本の温泉地と韓国の料理を結合させ、新たなサービスを開発し、提供することで町を活性化させる試みです。たぶん、福島でも応用可能なシステムであると思いますので、他の村の姉妹縁組みを参考すれば、役に立つ何かが見つかると思います。

<李 志炯 (イ・ジヒョン) Lee Ji-Hyeong>

2007年啓明大学(韓国)産業デザイン科卒業。2007年6月来日、千葉大学大学院工学研究科

デザイン科学専攻修士課程終了。2011年～2013年、千葉大学発ベンチャー企業BBStoneデザイン心理学研究所で研究員として勤め、現在は千葉大学大学院工学研究科デザイン科学専攻博士課程在学。韓国室内建築技士・日本ユニバーサルデザイン検定の資格を保有。